

◆夏休みでの海外旅行時の感染症対策◆

アジアなどの途上国に滞在する場合は旅先で感染症に罹患するケースも少なくありません。そこで、どのような対策をとればよいか紹介します。

●海外旅行者にリスクのある感染症



飲食物から経口感染する**旅行者下痢症**や**A型肝炎**は、途上国のいずれの地域でも高いリスクになります。

旅行者での**下痢症の病原微生物(特に毒素原性大腸菌)**、**サルモネラ**、**カンピロバクター**などが多いことが明らかになっています。

●蚊に媒介される感染症



デング熱は東南アジアや中南米で流行しており、蚊の増える雨期に患者の発生が多くなります。

日本の夏休みシーズンは東南アジアの雨期にあたるため、特に注意が必要です。

マラリアの流行は、アジアでは特定の地域に限定されており、日本人旅行者が行動する範囲での感染リスクは比較的低いです。

その一方で、サハラ以南のアフリカ(ケニア、アンザニアなど)では観光コースがあり、注意が必要となります。

●狂犬病



動物から感染する**狂犬病**も海外で注意すべき感染症です。アジアでは観光客が訪れる都市部でもリスクがあり、2006年にはフィリピンでイヌの咬傷を受けた2名の日本人が、帰国後に**狂犬病**を発病しています。

を発病しています。

●予防対策

経口感染症の予防対策は途上国に滞在するすべての旅行者に必要です。

たとえば、飲料水はミネラルウォーターや煮沸した水を飲むことです。食品はなるべく加熱して接種することです。

マラリアやデング熱の旅行地域に滞在する者には、蚊の吸血を防ぐようにします。蚊の多い場所では皮膚の露出を控え、昆虫忌避剤を塗布する必要があります。

デング熱を媒介するネッタイシマ蚊は昼間、マラリアを媒介するハマダラ蚊は夜間に吸血する習性があり、それぞれの旅行地域では吸血の時間帯に応じた対策をとるようにします。

狂犬病の予防のためには、旅先でイヌなどの動物に接触しない注意をするとともに、動物に咬まれた場合、狂犬病の発病を予防するためのワクチン接種を迅速に受ける必要があります。

予防接種、予防内服

接種するワクチンの種類は、滞在地域、旅先でのライフスタイルなどに応じて選択します。マラリアの感染リスクが高い地域(サハラ砂漠のアフリカなど)への旅行者には、抗マラリア薬の予防内服が推奨されています。

発病した際の対応

海外旅行中に下痢や発熱など感染症を疑う症状がみられたら、まずは携帯医薬品(整腸剤、解熱剤など)で対処するようにします。もし症状が改善しなければ、早めに現地の医療機関に受診します。こうした事態に備え、出国前に海外旅行保険に加入しておくことを推奨します。

帰国後に症状がみられる場合は、熱帯病が診断できる医療機関(感染症科のある医療機関など)を受診します。

熱帯病の治療薬のなかには日本で承認されていない種類も多いが、こうした薬剤は熱帯治療薬研究班から入手することができます。

抗菌薬の適正使用ってなんだろう

抗菌薬の適正使用は、一般的な説明としては「抗菌薬の選択、用法、用量、投与期間、投与経路の最適化を推進することによって抗菌薬の適正使用状況を改善することを目的とした強制的介入」となります。

また、「抗菌薬使用に関連する最大の臨床効果を得ること、毒性やほかの副作用を軽減し、コストを削減し、さらに耐性菌の増加を防止すること」です。抗菌薬はあくまでも患者（動物たち）の治療を第一の目的として使用するもので、「耐性菌をたさないために」「副作用を出さないために」使用するものではありません。

*「適正使用にご協力を」と言われたら、なんだか今は「不適切」な使い方をしていると言われている気になってしまいます。誰だって「不適切」と言われたら気分が悪いです。抗菌薬適正使用を推進したいなら、まずは患者（動物）にとって明らかに有害な抗菌薬の使い方から正していきます。

●例えば、MRSA 感染症や真菌感染症にカルバペネム系抗菌薬を使用しているなどの「スペクトラムを外している」使い方や、腎機能に対して抗菌薬の投与量・投与回数が「多すぎる」「少なすぎる」使い方、髄膜炎なのに髄膜移行の不良な抗菌薬を使っている。などの使い方が該当します。

★アプローチを地道に続け、そのなかで「微生物検査の見方・考え方」や「de-escalation の考え方・やり方などを忍び込ませる」とよいです。「この人が言うのだったら、きっとそうなのだろう」と相手に思わせる信頼関係の積み重ねが重要と思われまます。抗菌薬の使用量と耐性菌分離率やコストとの相関などのデータを積極的に示すとよいのではないのでしょうか。

●「データ」は重要です。プロの仕事は思いつきや思い込み、感覚でやるものではなく、つねに「データ」をとり続け、自分の仕事が妥当なアルトカムに結び付いているのか、謙虚に評価する姿勢も必要だと思われまます。

電話対応術



電話対応は、対面ではないので、使う言葉、伝え方により感度を上げて、細心の配慮が必要です。

電話は、相手の顔が見えない。こちらの顔も見られません。

対面であれば、先生方や貴女の素敵な笑顔で、カバー出来ることがたくさんありますが、電話対応ではそれがなかなかできません。

態度は声に現れます

いくらきれいな言葉づかいでも、いくら流暢な話し方でも仏頂面で事務的な会話は電話を通して患者さんに伝わります。感じが悪く、冷たい電話対応となってしまいます。

電話だからこそ、態度に気をつけて対応しましょう！

80%のスピード！ で

120%の笑顔です！

「笑顔」がきれいなことです。

「鏡」を置くことです。自分の顔がいつでも確認できるように受付に自分に向けておいて下さい。電話が鳴ったら、その笑顔をさらに20%アップさせて電話に出て下さい。電話対応がグレードアップします。

自分の顔をいつでもチェック！

電話であろうとも姿勢よく、身だしなみを整えて、満面の笑顔で、礼儀正しく電話対応していきましょう。



“はい、気を付けます！！”

動物ケンサ 金〇信〇